

長崎市内の景観に関する意識調査

平 桂子¹⁾, 片山徹也²⁾, 庄山茂子¹⁾

¹⁾長崎県立大学大学院, ²⁾九州大学大学院

A survey on citizens' attitudes toward the landscape of Nagasaki City

Keiko Taira¹⁾, Tetsuya Katayama²⁾, Shigeko Shoyama¹⁾

¹⁾University of Nagasaki, ²⁾Kyushu University

Abstract: A survey was conducted involving citizens of Nagasaki City to examine their attitudes toward the landscape of the city and its issues by analyzing the influence of generational differences and length of residence on them. As a result, the attitudes toward the landscape significantly varied among generations and individuals with different lengths of residence; aged or longtime residents demonstrated high levels of interest in the landscape. Attitudes toward the protection of the landscape were more affirmative in citizens demonstrating higher levels of interest, pride, and attachment regarding the landscape. Their focus on the landscape varied in terms of historical/cultural streets, shopping centers, waterfronts, parks, and residential areas, according to the view. The presence of a large number of electric wires and telegraph poles was pointed out as a problem regarding the entire landscape of the city.

Key Words: landscape, color, generation, length of residence, protection of the landscape

要旨：本研究では、長崎市民を対象に長崎市内の景観に対する意識や問題点について調査し、世代ならびに在住年によってどのような差がみられるのか分析し、次のような結果を得た。長崎市内の景観に対する意識は、世代や在住年によって有意差がみられ、年齢が高い人または長く在住している人ほど長崎市内の景観への関心が高かった。また、長崎市内の景観への関心や誇りや愛着が高い人ほど景観に対する保護の意識が高い傾向がみられた。長崎市内の景観において重要視する点は、歴史的・文化的町並み、商店街、水辺、公園、住宅街のそれぞれの景観によって異なっていた。また、全ての景観における問題点に関しては、電線や電柱の数が多いたことが指摘された。

キーワード：景観、色彩、世代、在住年、景観保護

1. はじめに

近年、国や全国の地方自治体において、法律や条例により、積極的に景観形成の取り組みがなされている。また、市民の景観への意識も高まっていると同時に、地域の個性や特徴を活かした景観形成が求められている(恵谷ら 2007、高橋と内村 2010)。長崎においても地域の個性や特徴を活かした景観形成が必要である。そこで、本研究では長崎市民を対象に、景観に対する意識を調査し、世代や在住年によってどのような差がみられるか明らかにすることを目的とした。

2. 実験方法

- (1) 調査対象者：長崎市在住の 20 歳以上の住民 622 名
(平均年齢 42.4 歳 SD±16.2 歳 回収率 62.2%)
- (2) 調査場所：長崎県長崎市

(3) 調査時期：2010 年 4～6 月

(4) 調査方法：郵送及び留置きによる質問紙調査

(5) 調査内容：① 年齢、性別、在住年 ② 長崎市内の景観に対する意識 ③ 長崎市内の景観の魅力 ④ 歴史的・文化的町並み、商店街、河川や港などの水辺、公園や広場、住宅街の各景観で重要視する点と問題点

(6) 分析方法：クロス集計、 χ^2 検定、Fisher の直接確率法、Pearson の相関分析、一元配置分散分析

3. 結果

3-1. 長崎市内の景観に対する意識

景観への関心を世代別に比較すると、有意差が認められ、60 代が最も高かった ($P<0.001$)。年齢が高いほど関心が高かった(表 1)。同様に景観に対する意識を世代・在住年別に比較すると、世代では 6 項目に、在

住年では5項目に有意差が認められた(表2)。

表1 景観への関心

	20代	30代	40代	50代	60代～
全くない	2 (1.1)	2 (2.2)	2 (1.5)	0 (0.0)	0 (0.0)
あまりない	14 (8.0)	6 (6.7)	8 (6.0)	9 (6.7)	4 (4.6)
どちらともいえない	33 (18.9)	10 (11.2)	19 (14.3)	16 (11.9)	4 (4.6)
ややある	104 (59.4)	51 (57.3)	73 (54.9)	69 (51.5)	31 (35.6)
非常にある	22 (12.6)	20 (22.5)	31 (23.3)	40 (29.9)	48 (55.2)

上段：人数(人) 下段：割合(%)

表2 景観に対する意識と世代・在住年との関連

	世代	在住年
総合的な印象	***	—
景観への関心	***	**
景観色彩への関心	***	***
景観への誇り	***	***
景観への愛着	***	***
景観を守る必要性	—	—
管理指針の必要性	***	***

** P<0.01, *** P<0.001

3-2. 長崎市内の景観の魅力

各景観に対する魅力を世代別に比較した結果、4項目に世有意差が認められた(図1)。「路面電車が走る風景」(P<0.001)と「寺町通り」(P<0.01)では、60代以上は最も魅力的とした。「公園や広場」(P<0.01)では、20代は他の世代より高く、やや魅力的とした。「浜の町商店街」(P<0.001)では、20代はどちらともいえない、その他の群はあまり魅力的でないとした。

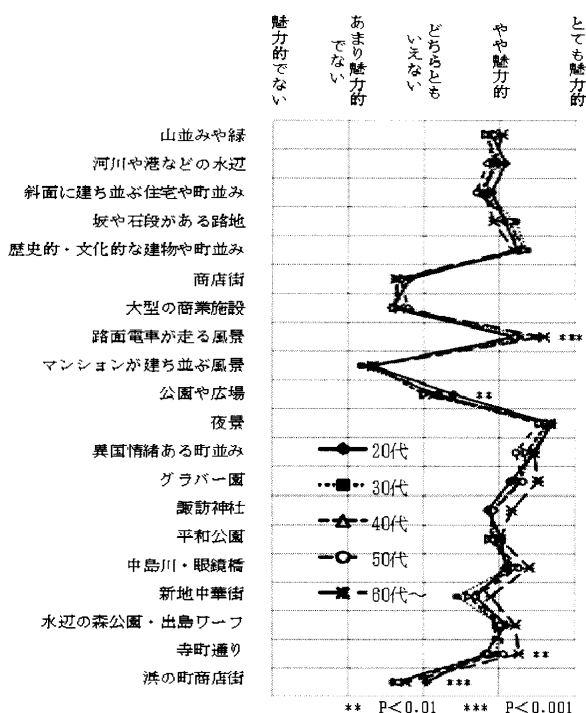


図1 長崎の景観の魅力

3-3. 長崎市内の各景観に対する評価

各景観で最も重要視する点について有意差が認められたのは、世代・在住年ともに商店街の「活気・にぎわい」であった(P<0.001)。年齢が低いまたは在住年が短い群で重要視された(表3)。

表3 各景観において重要視する点

重視する点	景観	歴史的・文化的町並み	商店街	河川や港などの水辺	公園や広場	住宅街
異国情緒	世代 在住年	501 (90.5)	151 (24.3)	213 (34.2)	95 (15.3)	18 (2.9)
自然との調和	世代 在住年	287 (46.1)	49 (7.9)	443 (71.2)	446 (71.7)	227 (36.5)
活気・にぎわい	世代 在住年	128 (20.6)	492 (79.9)	60 (9.7)	97 (15.8)	101 (16.5)
静けさ	世代 在住年	55 (8.8)	15 (2.4)	136 (21.9)	136 (21.9)	323 (51.9)

上段：人数(人) 下段：割合(%) ■ 各景観で最も多い項目 *** P<0.001

全ての景観の問題点として割合が高かったのは「電線・電柱の数」であった(表4)。特に、歴史的・文化的町並みにおいて最も高く、年齢が高いまたは在住年が長い群の問題意識が高かった(P<0.001)。

表4 長崎市内の各景観に対する問題点

問題点	景観	歴史的・文化的町並み	商店街	河川や港などの水辺	公園や広場	住宅街
屋外広告や看板の大きさ(高さ・幅)	世代 在住年	198 (31.8)	136 (21.9)	109 (17.5)	98 (15.8)	58 (9.3)
電線・電柱の数	世代 在住年	295 (47.4)	204 (32.8)	176 (28.3)	169 (27.2)	208 (33.4)
自動販売機の数	世代 在住年	201 (32.3)	155 (24.9)	150 (24.1)	122 (19.6)	106 (17.0)

上段：人数(人) 下段：割合(%) ■ 30%以上が回答した項目 *** P<0.001

4. 考察

景観への関心や誇りや愛着は年齢が高いまたは在住年が長い群が最も高かった。総合的な印象で最も良いと評価したのは20代で、次いで60代以上であった。20代は、各景観に対し問題があると指摘した割合が低かったこと、60代以上は景観への愛着が高かったことが総合的な印象を高くしたと考えられる。また、40代の総合的な印象が最も低かったのは、景観への誇りや愛着が他の世代より低かったためと推察される。

各景観で重要視される点は異なっていたことから、それぞれの町並みに合った景観形成が必要と思われる。さらに、景観の向上、十分な歩道の確保、防災、通信回線の信頼性向上等の観点から、電線類地中化等の無電柱化の取り組みが求められる。

5. 文献

恵谷浩子、松村真、麻生恵 2007：農村地域における景観形成に関わる住民の認識と行動の構造化、ランドスケープ研究：日本造園学会誌、70(5)、575/578
高橋梢、内村雄二 2010：地域の個性ある街並みの創出に向けた景観計画策定に関する一考察、福井工業大学研究紀要、第40号、401/410

<連絡先>

著者名：平 桂子

住 所：長崎県西彼杵郡長与町まなび野 1-1-1

所 属：長崎県立大学大学院 国際情報学研究科

E-mail：m2210001@sun.ac.jp